シンポジウム　趣意書

公共哲学から公共性の思想史へ

—共和主義・市民社会・国家—

公共圏概念をめぐる研究は、規範的政治理論の領域を中心とした近年のいちじるしい発展のいっぽうで、その歴史研究としての基盤についてはいまだ脆弱なものにとどまっているといわざるをえない。当該研究に先鞭をつけたと目されるハーバーマスの古典的著作『公共性の構造転換』（1962 年）を、最近の思想史研究の進展をふまえてあらためて歴史研究として再読し、批判的に検討しなおす作業が求められている。とりわけ、同書出版以降の時期に急速に進展した共和主義研究は、公共圏研究にとってまさに直接に関連する動向だったにもかかわらず、研究成果の摂取は依然として進んでいない。近世ヨーロッパにおいて公共性が問題となる第一の契機は、ハーバーマスが想定するように初期資本主義のもとでの市民社会の発展にあったのではなく、むしろ共和主義の再興にあったとみるべきである。それは政治社会から区別された自律的な経済領域と

しての「市民社会」を対象とするものではなく、依然として古典的な意味での政治思想であった。

公共性の問題を考えるうえで欠かすことができないのが、市民社会という理念である。これはもともと、アリストテレス政治学において人間がめざすべき最高の共同体とされた「政治的共同体」の概念をラテン語に翻訳する際に与えられた、ソキエタス・キウィリスの語に由来する。この語は、ルネサンスいらい古代共和国の理想を復活させた近世共和主義者がポリテイアに与えた訳語である「レスプブリカ」（公共のものとしての国家）と同一視される。つまり、ヨーロッパの思想伝統のなかでは「市民社会」とは政治共同体としての国家であり、ここに公共性の所在は見定められたのである。もちろんハーバーマスが論じたように、啓蒙の世紀になると、政治社会や統治機構とは区別される自律的な市民社会——交換と分業の体系としての商業社会——が勃興するなかで「ブルジョワ的公共圏」が出現するが、それでも先行する古典思想のフレームワークが容易に無意味化することはなかった。この意味で、共和主義を知らずして、公共性や公共圏を歴史のうちに適切に位置づけることはできない。ところが日本では、講座派マルクス主義や戦後の市民社会派の影響もあり、「国家に抗する市民社会」という図式のもと、市民社会はもっぱら国家との対立関係のなかで理解されてきた。それ自体すぐれて政治的で規範的というべきこの与件が歴史をみる眼を曇らせてきたことは、近年、植村邦彦や坂本達哉などによって批判され、もういちど虚心坦懐に[1]思想史を検討する機運が生まれつつあるようにみえる。

本シンポジウムでは、できるだけ巨視的な視点に立ちながら、初期近代から 19 世紀前半ごろにかけての公共性という理念の受容と展開を、大ブリテンと大陸ヨーロッパの双方に視野を広げて検討することを試みる。従来の研究史で注目されてきたのは、18 世紀半ば以降の啓蒙思想の展開、とりわけヒュームやアダム・スミスをふくむスコットランド啓蒙とヘーゲルを中心とするドイツ啓蒙であった。そこでの市民社会論の形成を、その前史たる共和主義の思潮を十分ふまえたうえで再検討していくことが近年の課題となっている。上野（第二報告）は、研究の進展著しいスコットランド啓蒙のなかでもいまだテクストに内在した研究が行なわれているとはいいがたい前期啓蒙の代表的思想家ハチソンに焦点をあて、実際には市民社会という言葉がなお政治社会の意味で使われていたこの潮流のなかで、市民社会論のプロトタイプとでもいうべきものが出現してくる様子をあきらかにする。植村（第三報告）は、概念史上はじめて国家と市民社会の区別を体系的に表明したヘーゲルをとりあげ、翻訳を通じてドイツの新たな市民社会論の誕生に影響をおよぼしたスコットランド盛期啓蒙（ファーガソンとスミス）との比較研究をとおして今日的な意味での市民社会概念の成立過程を跡づける。他方、啓蒙期の公共性・市民社会論の展開の「前史」をどのように設定するかはいまだ開かれた問いであり、両報告でとりあげられる共和主義は最有力の候補ではあるものの、前史がすべてそこに還元されるわけではない。スコットランド啓蒙以降の公共性理解の変容を測定するキーワードとして市民社会に代わって注目されるのが「文明社会」の語であるが、この語にしてもスミスらによって「商業社会」と等置されるのに先だつ、固有の歴史の蓄積がある。木村（第一報告）は商業社会論に先行する文明の理念を、宮廷社会の拡大という近世史を彩るもうひとつの趨勢との関連のなかで検討する。共和主義者たちの理解ではしばしば公共性（共和国）と対立する政体とみなされてきた帝国は、この伝統のなかではむしろ積極的な意義があたえられてきた。啓蒙期のいわゆる市民社会論の「前史」を、より内在的な視点からそれ自体として検証していく作業も、新たに描きなおされるべき公共性の思想史にとって不可欠の前提である。

（文責： 上野大樹）

[1] むろん絶対的に客観的な歴史叙述などありえず、アクチュアルな同時代的関心から完全に自由な記述は原理上不可能だが、しかし観察者の規範意識をできるかぎりエポケー（括弧入れ）しようとする態度は不可欠であろう。